

なる。

しかしかくの如きは、又は一石二鳥の嫌なき語はむもので、其叙述や、もすれば緊張味をかき、或は繁雜に流れ、或は又社會經濟史的説明未だしの憾を残してゐると云はなければならぬ。勿論、本書が種々の條件に制約せられかくの如き一石二鳥的企を敢てした事情を諒とし、述べられた新たな學說、新たな意氣に對し深甚の敬意を吝まざるものではあるが、同時に著者の今後の研鑽に大いに期待するの念頗又湧然たるを禁ずることが出来ない。(本文三五四頁、附録一五八頁、東京、學藝社、定價二・八〇)(以上吉田)

● Ernst Walsers: Gesammelte Studien zur Geistesgeschichte der Renaissance

著者アルセル氏はバーセル大學ロマンス言語學教授の地位にあつた人であるが、千九百二十九年六月二十九日惜しくも逝去した人である。氏はかかれてよりルネサンス精神史に關する著述の完成を志し、着々準備を調べ最早執筆する途に至つてゐた由であるが、惜しくも完成するに至らず逝去されたのであつた。逝去の前年既に病篤き際にも氏の唯一の願望はこれが完成にあつたとかその心中察するに餘りある。本書はその生涯の仕事の完成を見ずして逝去した氏のルネサンス精神史に關する準備研究及び特殊研究の一部を纏めて出版したものである。内容は序文、附録及び W. Kraege 氏の Über die Renaissanceforschung. E. Walsers. なる紹介の他に次の十二の研究を含んでゐる。

- Die Konzilien von Konstanz und Basel, zwei Etappen in der Geschichte der Kirchenreform und des Humanismus.
- Coluccio Salutati, der Typus eines Humanisten der ältesten Schule.
- Boccaccio.
- Christentum und Antike in der Auffassung der italienischen Frührenaissance.
- Ein Raubritter der Feder (Pietro Archino)
- Ueber das Wesen der französischen Renaissance.
- Studien zur Weltanschauung der Renaissance.
- Die Entstehung von C. F. Meyers Novelle: Plautus im Nonnenkloster.
- Der Sinn des Cymbalum mundi von Bonaventura des Péters.
- Alte und neue Ideale der Renaissance im Epos des macaronischen Singers Teofilo Folengo.
- Die Gestalt des tragischen und des komischen Tyrannen in Mittelalter und Renaissance.
- Menschliche und künstlerische Probleme der italienischen Renaissance.
- アルセル氏は千九百十四年ボツヂオに關する研究を發表して學界にその地位を確立したが、氏の最も力を入れたのはイタリヤルネサンス期のフォニスムス研究である。而して氏の研究に

於て先づ吾人の注意を引くのはルネサンス文化に於ける *Reinhold Koselleck* の問題についてである。元來この問題はルネサンス文化研究に於ける最も困難な問題の一つであつて、従來一般にこの點に於て中世とルネサンスとの最も顯著な差違があると、中世のカソリシズムに對してルネサンス人の宗教感缺乏を對比した。しかしながら *Triebel* によつて主張される立場はルネサンス文化の開始を中世に遡らせると共に、ルネサンス文化に於ける中世的要素を強調することとなり、その結果ルネサンス文化に於ける基督教的信仰要素を極端にまで主張するに至り、これと共に *Neumann, Burdach* もそれ／＼自己の立場よりルネサンス文化の宗教性を問題にしたのである。マルセル氏自身初期の研究に於ては未だルネサンスと中世とを強く對立せしめてゐたが (*S. XX*) 既に *Christentum und Antike*……(1913) の論文には中世、ルネサンスを宗教性如何によつて對立せしめる事の危険について述べており (*S. 21*) 更に氏はホツヂオ研究に際してホツヂオの古典崇拜精神と共に彼に於て強き基督教的信仰の存することを主張したのである。以來氏は多くのフマニストの特殊研究によつて一更その説を確かめ、「ルネサンスが宗教的に無關心であつたとの舊來の主張はペトラルカに始まりブルノに終る運動の全經過について誤つてゐる」(*S. 288*) と主張したのであり、かゝる主張よりフマニストと僧侶とを本質的に對立せしめる *P. Monnier* 説の誤謬を指摘したのである。然しながらかくのごとくフマニストの宗教性を強調する一方氏

はルネサンスに於ける古典復興の意義、民族的特殊性、羅馬觀念等をも重要視し、ルネサンス文化の本質的要素として美的衝動を考へた點 (*S. LIV, S. 103*) に於て *Thode, Burdach* 等とも立場を異にするものである。結局氏においてルネサンスは「天と地が協力した藝術品」と考へられたのであり、それは單に地上的なるもの、人間的なるものへの復歸によつて成立するものではなく、あらゆる地上的なるものに形態を賦與する精神的要素との協力によるものとしたのである (*S. 112*) 筆者は今かゝる解釋に對してその當否を批判する力を有しない。只敢て述べるならば筆者にはルネサンスが全く宗教性を缺いてゐるとは思へないが、たゞその宗教性は氏の説くが如きものよりもつとネガチーフな性質のもではなからうかと推察するのみである。ともあれ以上の如き立場は本書中の諸論文に於て窺へる最も顯著な點であり、一般的に云つて氏の研究方針はルネサンス文化の統一的理解に向ふよりは、むしろ縦の關係に於て個々の現象をそれ／＼年代的系列に隨つて研究するにあり、その結果繼續に重點を置くことになつたのである。

本書論文中には尙フランスに關するものがある。氏は早くよりフランス文化にも關心を持ち、終生その研究を續けたとのことで本書にはその研究中ルネサンス關係のものが一部收められてゐるにすぎない。尙亦卷頭 *Kriegel* 氏の紹介は單なる經歷の紹介ではなくマルセル氏のルネサンス研究の發展及び氏の立場についての秀れた紹介である。

要するに本書は秀れたルネサンス文化研究者たりしアルセル氏の論文集としてルネサンス研究者の熟讀すべきものである。

(Verlag von Benno Schwabe & Co. Basel, 1932, LX+359 Seiten 16 M.) (監見)

● 列國史  
叢書 亞米利加史

淺野利三郎著

三省堂發行にかゝる列國史叢書の一つとして、著はされた本書は、上・下二篇より成り、上篇に於て、著者は「アメリカ植民地時代から建國時代へ」の概況を、下篇に於ては「アメリカの國民的發展時代から帝國主義時代へ」の概觀を試みてゐるが各篇各々九章にわかたれ、其發展過程が略々年代順に記述されてゐる。

即ち、上篇第一章に於ては、著者が「商業資本が新市場を開拓する必要と希求」に驅られた事を以て、其「決定的要因」(一四頁)としてゐる新大陸の發見、並びに其結果としての歐洲列國、殊に西班牙の植民地經營の状態を、第二・三・四章に於ては其後遅ればせ乍ら馳せ參じた、而も「直に現在の住民並富源を利用し得べき地方のみを植民的活動の對象とした」其等初期植民地經營とは異なる「自己の勞力によつて他日初めて農業的工業的富力を生ずべき空地の占領を企圖し」(五八頁)「植民地將來の發達を阻碍するが如き性急な經濟的掠奪を行ふ」(五七頁)を排撃せる英國の植民地經營の跡が、而して第五・六章に於ては其必然的結果としての「事實上恰も一の獨立せる國民を形成

するが如き状態を(さへ)呈」(一一二頁)するに到つたアメリカ植民地人の「經濟的、社會的、文化的諸方面」(同頁)に於ける驚く可き躍進振り、従つて其は、勢ひ本國支配階後との對立激化を醸成し、遂に「經濟的原因」を「最も重要な原因」(一一三頁)として勃發するに到つたアメリカ獨立革命の過程

が、而も一第七章に於ては、其に成功せる同國の運命は、列國、殊に英國の強烈なる壓迫があつたにも不拘、其直後勃發せるフランス大革命並に其に引續く大戦亂中、同國が「唯一の主要なる中立國として交戰國植民地間の貿易の主要なる擔當者」となるの好條件に恵まれたが爲、同國の「通商及び海運は、爲めに最も急激且つ顯著なる發達を遂」(一六七頁)ぐるを得、其後歐洲の戦雲漸くおさまり、再び、列國の對米政策が積極的となるに及んだ後と雖も、同國の資本主義は「世界の寶庫とも言ふべき」偉大なる「自然の力」(五三頁)に幸されて、愈々着實なる發展の跡を辿るを得、遂に「モンロー主義」の宣言をなすに到つた過程を、而して第八章に於ては、其發展の跡を殊に工場制度の内に見ると共に、其結果としての「自由貸銀勞働に基礎を置く近代資本主義經濟」(二二頁)に立脚せる北部と「Cotton King」と謳はれたる棉花栽培に、奴隸制度を以てせる南部との諸對立、その爆發としての南北戦争の概説がなされ、最後の第九章に於ては「神話傳説の無い」(二二四頁)アメリカ文化の發達が植民時代・獨立革命時代・建國時代の夫々について述べられてゐる。